

震災がつなぐ全国ネットワーク・移動寺子屋 in 世田谷  
「もう一人のいのちを守るため私たちができること」

- 日時：2010年2月23日（火）18:45～21:15
- 場所：世田谷ボランティアセンター
- 講師：片田敏孝氏（群馬大学大学院教授）
- 参加人数：震つな会員、世田谷ボラ協関係者、一般住民等 24名

○趣旨説明（栗田）

震つなは15年前、名古屋、福島、栃木等から神戸に向かって支援に入った団体が被災地での学びを共有、検証することから始まり、それを継続している。最新版の文化編を含め、8冊のブックレットを発行した。

災害が起きたら現場に駆けつけて支援を行っており、災害が全国的に多発する2004年までは全部の被災地を回っていた。

水害の世紀と言われるこの時代にあって、内閣府の避難支援プランを作るにも住民に届くまでは時間がかかる、避難準備情報も肝心の人たちに伝わっているか、など問題は多い。被災者となる前に私たちができることは何かを考え、被災者に寄り添うことができる震つなでありたい、今日は、被害抑止のためになにができるか、といったことを学びたい。

○講演「水害の世紀～その時、避難の判断はどうあるべきか」（片田敏孝氏）

私はほとんど避難の問題をやっている。研究者として最大限のパフォーマンスを発揮するために、被災地で学んだことを次に生かす。経験を伝えるのが研究者としての使命だと思っている。

（増える水害）

今、風水害はゲリラ豪雨だけではなく、

台風も増えている。

昨年、台湾南部で3日間に3,000mmの雨が降った。現地に入って、村ごと埋まるような土砂崩れを見た僕は、「あきらめる災害もある。しかし僕らはあきらめてはいけない災害に対応している。備えられる災害には備えたい」と痛感した。

水害にはリードタイムがしっかりある。ボランティアの方々には、事前の対応にシフトしていただきたい。

我々が強い雨だと感じるのは時間雨量15～20mm。30mmでワイパーが見えなくなり、50mmで低所に内水がたまる。100mmの雨は10分も降ればそこかしこで浸水が始まる。

これが地球温暖化の影響であることはIPCCも明確に断言している。本来温帯の雨はロンドンやパリのような雨。今の豪雨は、「スコール」。房総沖の海水温は既に台風が生まれる26～27℃に達し、東京湾には熱帯魚が住み始めている。皮膚感覚で「気温が上がった」と感じる温度差はたった1℃。これが今後30年間に何もしなければ4℃、環境保全しても1.8℃上がるという。鳩山さんが25%の温室効果ガス削減と言ってひんしゆくを買ったが、これはやるよりしょうがないことだ。

台風はリードタイムが長いので、きちんとした対応さえあれば備えられる。巨大台

風であればあるほど予測精度は高くなっていて、36時間前であれば、ルートはほぼ予測できる。しかし36時間前は快晴。晴れているときに避難勧告を出して住民がメッセージを受け取れるのか。これは事前のコミュニケーションの問題である。

(住民の対応力を削いでいる日本の防災)

都賀川の事例以後、国交省は対策として赤色灯をつけると言った。悪いことではないが、これでは情報の出し手の行政、受け手の住民という構図は変わらない。「危ない時には赤色灯が回る」と信じた住民は、今の住民と行政の関係でいけば、「回らないから逃げない」となる。そもそも、全長1,790mの川の中で、つけないところは安全なところという意識にならないか？ちなみに82個設置した赤色灯は1週間の間に半分回ったという。意思の疎通を図るにも関係構造があり住民サービスとしてつければ良いといった単純な話ではない。

2008年の8月末豪雨の際、岡崎市は全市民37万人に避難勧告を出した。岡崎市民の証言によるとこのときは「雷が鳴り続けて懐中電灯がいらなかった。雨がすごい勢いで降っており、跳ね返る水しぶきが1~1.5m息苦しかった。丘陵地なので植木鉢がごろごろ流れてきた。足がすくむ思いだった。」という。

日本の避難勧告は行動指南情報で避難とは「指定の避難所に逃げること」。これに従ったのは51人。しかしもし多くの人がこんな状況下で勧告に従って逃げていたらもっと多くの人が死んでいたのではないのか。

行政からすると地域内に逃げざるを得ない人がいる以上、勧告は出さざるを得ない。

が、それぞれの市民にとっての最適行動を誘導してはいない。

今後の避難勧告は「避難を必要とする状況ですよ」という状況情報にしなくてはならない。これを聞いて、個人が立地場所、家屋、家族の状況から判断をせざるを得ない。自分で判断できる住民でなくてはいけない。

以上の事例からは日本の避難制度そのものが破たんしていると言えるだろう。避難勧告が出たら逃げる、出なかったら逃げないということではない。

といっても自分で判断するのは難しいので、それをサポートする行動指南型ハザードマップ(逃げどきマップ)を作った。あまりにも専門的なことがいろいろあり、自己責任で考えるには余りにも難しい。

佐用町の事例(2009年8号台風)の与えた教訓はさらに複雑だ。8月10日、ひどい雨の降り始めは7時半だった。佐用町はH16年にも災害に遭っており、激特の指定を受けて堤防のかさ上げをしていた。地域住民の意識は高かった。しかし、それ故に避難勧告が出る前に万全を期した行動をとった行動があだとなって亡くなってしまった。これまで、防災意識を高めましょうと言いつけてきた僕は、それを聞いたときにまずいと思った。

佐用町の経験からわかることは、「防災意識が高い=避難所に直ちに行くこと」ではないということだ。単に防災意識が高いだけでなく、住民は難をやり過ぎず知恵をつけなくてはならない。しかし、それが何であるかを知るのは本当に難しい。

(災害対策基本法の功績と限界)

災害対策基本法は1961年、伊勢湾台風を契機にできた。それまでは毎年数千人規模の死者が出ていたが、これが100人をきるまでになった。この功績は認めるべきだ。しかし数千人を100人に減らす防災と、100人をゼロにする防災は違う。ここに災対法の限界と弊害がある。

日本の防災の原点は消防団にある。江戸の火消しの真剣さは、全く今の防災に欠けていること。水防も同じで地域を「まもりたい」と願い、時には向こうが切れてくれと祈りながら土のうを積んだ。この頃住民には災いをやり過ごすための知恵があった。しかし、災対法の方法によって100年確率の雨は行政が守りきる、すなわち小さい災害を全部なくすことになった。また当時は行動成長期でその財力もあった。結果、無防備になった住民に襲いかかるのは大きな災害のみという完全な依存状態を作り上げた。これは過保護な親が脆弱な子どもを育てているのと同じ構造で、かつ50年間かけてできた文化はそう簡単には変わるものではない。

(行政と住民の関係構造)

近年さすがにこの構造がおかしいと気が付き始めて言われるようになったのが、「自助」、「共助」、「公助」の重要性という言葉だ。しかしこれには2種類あると思っている。一つは、「受け身の自助」。行政に限界があるから自助、本来なら行政がやるべきだけど、限界があるから自助、という説得の仕方をするが、本当にそうなのか。もうひとつは「内発的自助(主体的自助)」。これは昔の日本の防災そのものだ。

この二つはその後の行動を完全に変える。

例えば、「避難勧告が出たら逃げてください」というメッセージを出した場合、「受け身の自助」の人は「避難勧告が出るまでは逃げなくていい」というメタメッセージを受け取ってしまう。外れ続けた警報が当たった場合に、「やっぱり逃げてて良かったな」と思えるか「やっぱり逃げておけば良かった。」と思えるかは主体的に命を守る姿勢があるかによる。

主体的な自助意識のなかで「災いをやり過ごす知恵」を身につける、そういう防災を僕らはやらなきゃいけない。



### ○会場との意見交換

Q 先生のお話はよくわかった。問題はこれをどのように普通の人に伝えていくかでは？

A 結局は地道な活動しかないが、概論的に「防災教育」のステップについて触れたい。我々が往々にして犯す間違いは「脅しの防災教育」。佐用は、神戸はこういう経験だったというのは恐怖喚起のコミュニケーションと言われるが、人間、怖いという気持ちは長続きしない。だからこそ穏やかに生きていけるとも言える。次は「知識の防災教育」。知識を与えて合理的な判断を仰ぐが、人間にはまっとうにリスク情報を受け

取れない性質があり、伝わらない。

必要なのは「理解・納得の防災教育」。敵を知ること以上に大事なのは己を知ること。適切な行動をとれない自分を知ることだ。

もうひとつの要点は、相手を否定しないこと。家とともに死ぬから逃げないというばあちゃんには、ばあちゃんの尺度をまず認めよう。息子が悲しむよ、などこちらの尺度も教える。大事なのは、彼らのためを思ってこの地域の犠牲者をゼロにしたいということを一生涯懸命すること。

Q 救急法を教えていて、危険に対する感知能力が落ちていると感じる。伝える側のプログラム力が問われているように思う。津波対策として着衣泳を教えるべきかという議論がされたことがあるが、水の危険がわからない人に静水（プール）での着衣泳を教えることは善なのか。指導者の側の思いあがりがあると、教えることが却ってマイナスの結果を与える結果を招く。

A 全く同感。

Q 先生のお話は危ない匂いをかぎとれる人間になれと言っていたように思うが、例えば東京で地下街に水が入ってくる際には危険なおいがないような気がする。

A そんなに難しいこと要求しているわけではない。みんながそうしているから自分もそうしているという受け身の態度から前向きに備える姿勢を持ってもらうよりしようがない。しかしそれが難しく、今の防災が当たっている壁のような気がする。

Q 佐用町の例では水を見て流されそうだ

からと戻った人もいたという。結果を見て我々が正誤を判断するが、逆のことが起きる可能性もあるか？

A もちろんこれは結果論。要は何が最適な策だったかは「わからない」。それは逃げるべきか留まるべきかという判断は高度なレベル。僕が危機感を持っているのは、危ない状況についての知恵を持っているか、あるいは全く無防備で「逃げろと言われなかったので逃げない」と言ってしまうレベル。佐用の例の方は非というべきではない。

Q 幕山の現場には今ガードができています。しかし、本来の防災はこれをそのまま残して、なぜここで流された方がいるのか学ぶことではないのかと思う。

A 仰る通り。これはこの問題ではなく、日本の風土、文化の問題。ぜひ皆さんのような方にこれからの防災はどのような方向に進むべきかという議論を継続してほしい。これを変えていかないと日本の防災は良くなる。僕自身もこんなに仲間がいることを嬉しく思う。



(文責：事務局／松田)